

# 第68回現代歌人協会賞選考経過

吉川宏志

前年に刊行された協会会員以外の第一歌集から、特に優れたものを推薦する会員アンケートを今年の初めに行い、一七九票（内無効票十二票）が投じられ、三十八作に票が入った。選考委員七名（石川美南・内山晶太・梅内美華子・春

会への批判を生み出した異様な世界観が面白い。

・中井スピカ『ネクタリン』（本阿弥書店）

人間の孤独への認識を深めつつ、明るさを失わない、ひたむきな姿勢が魅力的。

・佐藤華保理『ハイヌウエレの手』（本阿弥書店）

出産と母の病という生死の境界をなまなまと描く。職場の歌、娘の歌もユニーク。

上位四作について、四月十一日の午後四時から六時まで、学士会館において、選考委員七名による、真摯な討議が行われた。

・睦月都『Dance with the invisibles』（角川書店）

人らみな羊歯の葉ならばをみなともをのこともなくただ憂ふのみ

けはひなく降る春の雨 寂しみて神は地球に鯨を飼へり

性別に束縛される社会を脱け出し、女性同士の連帯を志向しようとする。文語旧仮名を用いた柔軟な韻律が快く、二首目のようなスケールの大きな発想も見られる。

葛原妙子などの撰取が巧み過ぎ

ることを危惧する声があった。

・郡司和斗『遠い感』（短歌研究社）

一人だけの民族みたいはなびらをひたいにつけて踊るあなたは潰されて染みになっても毛虫だとわかる 毛虫はたいしたもんだ

軽やかな表現の中に、表層の奥にあるものを探る批評性がある。

SNSやサブカルチャーの語彙を用いた歌に、流行にもたれすぎではないかという批判もあった。

・濱松哲朗『翅ある人の音楽』（典々堂）

白鳥を焼くをとこめて私にもすすめてくれるやはらかい部分

心身を病みてうしなふ職あればわれに値引きのパンやさしけれ貧困など、社会からの圧を内部に溜め込んで発する言葉に迫力がある。聖書や音楽の知識を深く受け止めて作歌している。

対話の少なさに息苦しさを感じるという感想もあった。

・菅原百合絵『たましひの薄衣』（書肆侃侃房）

一生は長き風葬 夕光を曳きてあかるき樹下帰りきぬ

くちづけで子は生まれねは実をこぼすやうに切なき音立つるなり

フランス文学の教養を基盤としつつ、恋や性や美を詩情豊かに歌っている。恋をまっすぐに歌っているのが最近では珍しい。

くちづけで子は生まれねは実をこぼすやうに切なき音立つるなり

従来の抒情に従順すぎるのではないか、という疑問も上がった。

議論を重ねた結果、新しい世界を切り拓いた点を評価し、『Dance…』『遠い感』『翅ある人…』の三作に絞られた。そして全員の評価が高い『Dance…』の受賞がまず

確定的になった。

近年の協会賞は同時受賞も多くなっている。価値観が多様化し、一作に決めるのが困難なことが要因である。『遠い感』または『翅ある人…』の同時受賞もじっくりと検討された。しかし、この二作については賛否が分かれ、いずれかを同時受賞にするのは難しいという結論となった。『遠い感』『翅ある人…』は、それだけ個性が際立つ歌集であったことを強調しておきたい。

感情を人質に取るやうなことをしてたし、されてゐた、恋の洞

『Dance with the invisibles』

こうした歌にも注目した。欲望の暴力性に敏感であり、透明な感情を求める作風が、これまでになく清新な美を生み出している。またこの新しさには、過去の短歌に

対する敬意がこもっている。

優れた新人の登場を心から喜ぶたい。今年度は充実した候補作が多く、新しい短歌の波が生まれてきていることを実感した。

たい。今年度は充実した候補作が多く、新しい短歌の波が生まれてきていることを実感した。

たい。今年度は充実した候補作が多く、新しい短歌の波が生まれてきていることを実感した。

たい。今年度は充実した候補作が多く、新しい短歌の波が生まれてきていることを実感した。

# 現代歌人協会会報 179

日いづみ・駒田晶子・中沢直人・吉川宏志）は、アンケート結果を参考にしつつ、候補に残すべき歌集を五作ずつ推薦した。十四作が上がり、複数票が入ったのは、七作であった。

ただ、五票以上が四作、二票が三作であったため、合議の結果、上位の四作を最終候補とすることに決定した。惜しくも最終候補から外れた三作は次の通りである。

・土井礼一郎『義弟全史』（短歌研究社）  
虫のイメージを用いて、父性社

